

研究の現場から

敵か味方か、見方の違い

ダムに蔓延したアカウキクサの防除に手をこまねいていたところ、いつのまにか姿を消してしまったとの報道があった。ミズメイガの幼虫が食べ尽くしてくれた結果である。

これは兵庫県川西市の一庫ダムでの出来事である。ダムの水が澄んできたことで関係者と住民はまるで救世主が現れて、自然が解決してくれたと大喜びであるとの声も報告されていた。生物防除といえるかどうかの真偽はともかく、厄介者がいなくなったことは事実である。

この報道からフィリピンに滞在していたころ、ダムや湖でホテイアオイが繁殖して、河川に流れ込み、厄介もの扱いされていたことを思い出した。

湖では魚の養殖もしていたので薬剤防除をすることもなく、繁殖すれば河川に逸出して、地域に広がっていく。定着するところがあればいいが、なければ海まで流されることになる。対策として豚の飼料にすべく、収穫されることもあった。詳しいことはわからないが、豚が食べた後、腸内でガスが発生することから与え過ぎはよくないとのことで利用されることは少なく、再び雑草扱いになった。

住んでいたマニラ市内の近代的な公園の池にはボタンウキクサ（ウォーターレタス）が栽培されていて、あるとき2株程度失敬して室内で鑑賞していたこともある。

ホテイアオイの葉柄は布袋さんのような豊かさがあって、紫色の花も上品である。ボタンウキクサのピロードタイプの葉はふくよかである。いずれも鑑賞用として使えるものである。

ホテイアオイはペット屋さんで販売され、魚とともに水槽で育てて楽しめるが、クリークでの増殖は問題になっている。

園芸植物として、もてはやされて栽培されている間はよくても、流行が廃れば消滅するか、勢

いの強いものは野生化していわゆる帰化植物（雑草）の仲間に入ることになる。

ミズメイガは厄介もののアカウキクサを駆除してくれた功績で救世主のように奉られた。しかし、この仲間の食草はヒルムシロ、スイレン、ハスあるいはコウホネとされている。観賞用に栽培されているスイレンやハスが食害されれば害虫として敵視される。

前述のホテイアオイやボタンウキクサは観賞用であれば大切に扱われ、エスケープすれば邪魔者扱いである。

雑草の定義は先人の「雑草学」で示されているとおりである。

雑草と有用植物を両極端に区別するのではなく、それぞれの存在価値を認めて共存できるほどの心の広さを持つことで、将来にわたって雑草防除問題と関わっていけるのではないだろうか？

さりとて、あり得ないことかもしれないが、防除対象であるノビエ、メヒシバ、ホタルイ、ハマスゲや少しきれいな畑雑草が貴重な観賞植物になってもてはやされても困る。



ホテイアオイ
Eichhornia crassipes
布袋葵

(文とカット 井上信彦)